

# 漢・三国・西晋鏡の流入経路

## －洛陽・武昌・楽浪・倭における出土鏡の比較を中心に－

馬淵 一輝

### はじめに

弥生・古墳時代の遺跡からは漢から西晋時代にかけて製作された様々な銅鏡が出土する。これらの中国鏡は東南アジアや中央アジアからも出土するものの、日本における量や種類の多さは際立っている。漢王朝は前108年、東夷諸民族を統制するために楽浪郡を朝鮮半島北部に設置しており、楽浪漢墓から出土する同種の副葬品や楽浪系土器が、朝鮮半島南部や日本列島から出土することから、ここを窓口として大陸文化がもたらされたと考えられている。楽浪郡と日本列島から出土する漢鏡は量・種とも同様の推移をたどっていたが、三国・西晋時代になると楽浪郡から出土する鏡が激減し、楽浪と倭の間に鏡の共通性を認められなくなる。後漢と三国の間に、楽浪を介していた大陸系器物の流通網が大きく変化すると指摘されているが、その後の鏡の入手先はよく分かっていない。

筆者はこれまで、後漢代の徐州地域や三国時代の魏の領域で製作されたと考えられる鏡を対象に研究を進め、各地域・時期に作られた製品の特徴を明らかにし、後漢と三国の鏡生産に技術や製作意識に大きな転換があったことを指摘した。そこで、本稿ではこれまでの研究成果を踏まえ、主要な鏡の出土地である洛陽、武昌、楽浪と日本列島（倭）の出土鏡の量・時期・種類をグラフで示すことにより、年代ごとの倭に至るまでの流通経路の変化を明らかにする。そして、楽浪に続く交渉先を追究するために、日本から出土する三国・西晋鏡の中国での出土地を示し、有力な候補地を提示する。

### 1. 後漢・三国・西晋鏡研究の整理と用語の定義

本稿では日本列島と洛陽、武昌、楽浪で出土した中国鏡の時期と種類ごとの比率を円グラフで示し、それぞれの地域の特徴を明らかにする。これらの地域間で類似する比率を示し、同様の製品が存在する場合、交易にともなう鏡の移動があった可能性が高いと考えられる。このような分析をおこなうためには、対象とする資料が製作された年代や地域を明確にすることが不可欠であり、近年、鏡研究の発展が目覚ましく複雑化の一途をたどっているため、現段階における後漢・三国・西晋鏡研究を整理し、筆者の年代観と用語の定義を示しておきたい。

**後漢・三国・西晋鏡の製作時期と鏡式** 先ず、対象とする鏡の時期区分と代表的な鏡式を挙げる。大枠は車崎正彦による整理をもとにしているが〔車崎編2002〕、近年の動向を踏まえ、後漢・呉鏡は岡村秀典の成果〔岡村2013・2017ほか〕、魏晋鏡は岩本崇の成果を反映している〔岩本2020〕。

漢鏡 5 期（1 世紀中葉～後葉）：方格規矩四神鏡、四葉座内行花紋鏡、細線式・浮彫式獸帶鏡、盤龍鏡

漢鏡 6 期（1 世紀末～2 世紀前半）：方格規矩四神鏡、蝙蝠座内行花紋鏡、浮彫式獸帶鏡、盤龍鏡、画像鏡

漢鏡 7 期（2 世紀後半～3 世紀初頭）：第 1 群（2 世紀後半～末葉） 上方作系獸帶鏡、飛禽鏡、袁氏作系画像鏡、八鳳鏡、獸首鏡 第 2 群（2 世紀後葉～3 世紀初頭） 画紋帶神獸鏡各種 第 3 群（2 世紀末葉～3 世紀初頭） 斜縁神獸鏡、画紋帶求心式神獸鏡

三国期（3 世紀前半）：魏 方格・円圈規矩鏡、細線式獸帶・鳥紋鏡、唐草紋鏡

呉 同向式・対置式神獸鏡、宝珠座八鳳鏡

西晋期（3 世紀後半）：神獸鏡の一部、双頭龍紋鏡、内行花紋鏡、小型鳥紋・唐草紋鏡

なお、製作地論争の続く三角縁神獸鏡について、筆者は現時点では「舶載」三角縁神獸鏡・「仿製」三角縁神獸鏡をそれぞれ魏鏡・西晋鏡とする意見に傾いている〔車崎 2002 編、岩本 2020 など〕。これらはよく知られているように、中国製を想定されているにもかかわらず、中国大陆で 1 面も出土しない特殊な分布を示す。中国王朝が倭のために特別に作らせたとする特鑄説や、倭の要請のたびに断続的に作らせたとする受注生産説など〔岩本 2020〕、特殊な状況下で生産された製品とみられるため、本稿の検討対象には含めない。

**漢鏡 7 期の細分** 漢鏡 7 期のみ 3 つのグループに細分したが、「日本列島への流入を考える上で、の便宜的な区分という断りを反映するように、漢鏡 7 期の細分は分布状況の違いに注目した理論的な枠組みである色彩が強い」〔上野 2014〕という指摘があり、岡村自身も「かつて漢鏡 7 期をおおまかに 3 段階に区分し、（中略）それは日本列島から出土する徐州系の鏡にもとづく段階区分であり、型式論にもとづいて各鏡種の細かい編年を組み立てる必要がある」〔岡村 2022〕など、問題提起されている。これらの指摘は、銅鏡の製作者の系統や流派が判明してきた成果を受けて、漢鏡 7 期第 1～3 段階は時期差ではなく系統差を反映している可能性が高まったことを受けたとみられる。そのため、これまでは「段階」と記してきたが、本稿では「群」と表記を改めた。

筆者も漢鏡 7 期第 1 群の上方作系獸帶鏡と漢鏡 7 期第 3 群の斜縁神獸鏡の間に、時間的な断絶があると想定していない〔馬淵 2022・2023〕。車崎や辻田淳一郎のように漢鏡 7 期の神獸鏡出現以降を、漢鏡 8 期〔車崎編 2002〕あるいは漢鏡 7 期後半〔辻田 2019〕と分けるのも一案と考えられるが、日本列島での分布や流入を検討する際には漢鏡 7 期の細分が有意に働く可能性もあるため、やみくもに区分を新設せず当初の編年案を踏襲する。

**魏晋鏡の具体像** 魏晋鏡とされている鏡式は、漢鏡に比べてはっきり提示されることが少ないため詳しくみておきたい。三国・西晋時代の銅鏡生産は、後漢代に発明された鏡式を模倣生産したに過ぎず新たに鏡式が創出されることが無かったため、模倣製作の段階に位置づけられている〔上野 2007〕。そのため、後漢か三国どちらの時期の製品か判別のつき難いものも多く、具体的な鏡式を示すことができなかつたのだろう。

しかし、魏の紀年銘をもつ獸首鏡をはじめ、年代の下る西晋墓や古墳から出土した鏡をもとに魏晋鏡の析出が進められ、後漢鏡と同じ鏡式でも三国・西晋とみなされるものが明らかになってき

た。先駆的な徐萃芳と森下章司の研究では、対象となる鏡式が双頭龍紋鏡や方格規矩鏡に限られていたが〔徐 1984、森下 1998、車崎編 2002 など〕、福永伸哉によって長方形の鈕孔や外周突線が魏鏡の特徴として見出されたことで大きく進展した〔福永 2005 など〕。福永は多くの資料を駆使し、通有の中国鏡には少ない長方形鈕孔と外周突線が後漢・呉鏡にほとんどなく、魏の紀年鏡や領域から出土する銅鏡に多く認められることを指摘した。岩本崇は主紋様の退化を中心に、鏡式ごとの魏晋鏡の細かな編年案を示している〔岩本 2020〕。先に挙げた小型唐草紋鏡や円圈座内行花文鏡などの西晋鏡の鏡式設定は、岩本の研究によるところが大きい。

**後漢・三国・西晋鏡の製作地と分布論** 後漢後半になると中国各地から様々な鏡式が出土し、銘文には官営工房であった「尚方」以外の「某氏」銘が散見するようになったため、銅鏡の製作者が各地に拡散していったと考えられる。上野祥史は神獸鏡、画像鏡、盤龍鏡を対象に、銘文の型式や紋様の配置などをもとに分類し、一つの鏡式の中に複数の製作系統が存在することを認め、これらが分布や銘文の工人名・特徴句の違いと対応することを示した〔上野 2000・2001・2003〕。近年では筆者も含め、製作者・集団に着目した研究が盛んにおこなわれている。

中国大陸のいつどこで作られた鏡が、どのように日本列島に流入したかを解明するためには、出土鏡の分布をデータで示すことが必要不可欠である。こうした後漢鏡の系統的研究や魏晋鏡研究の進展を踏まえ、後漢後半～西晋の鏡を対象に分布図が作成された。森下は、一部に上野の抽出した系統を採用し、「華北-東部系」「華北系」「銭塘江系」「長江中流域系」などの系統が、特定の地域からまとまって出土することを示している〔森下 2007〕。グラフや数値で示した研究では、辻田が日本出土鏡を地域・鏡式（型式）・遺跡の時代ごとに比率を示した〔辻田 2007〕。しかし、中国大陸における分布との比較は、いまだ十分におこなわれていない。

**製作単位の整理** ここまで、編年と分布の視点から研究史をまとめ筆者の見解を示した。次に、本稿で使う製作単位<sup>(1)</sup>の用語を、それぞれの研究成果を踏まえ示しておきたい。大枠は「中国古鏡の研究」班による銘文の検討と〔「中国古鏡の研究」班 2011ab・2012・2013〕、岡村による整理をもとにしているが〔岡村 2017 ほか〕、用語や分類基準に違いも多いので注意されたい。なお、説明の便宜を図るため製作年代、活動地域、主要鏡式、系統的特徴、代表的工人・工房名、その他の順に記した。後漢鏡の製作系統の概念図は図 1 にまとめた。

#### 【漢鏡 4・5 期】

尚方：「尚方」は系統とはいえないが、ほかと体裁を合わせるために本項目を設定する。前漢末～後漢初めの段階では、地方で活発な銅鏡生産はおこなわれず、官営の「尚方」工房が洛陽や長安などの中原地域で操業していたと考えられる。鏡式は方格規矩四神鏡・細線式獸帯鏡・四葉座内行花紋鏡などを挙げられる。「尚方」の特徴は見出し難いが、直径 20cm を超える大型鏡の優品や、「尚方御鏡」のように宮廷と密接な関係をもつ製品を含む。のちに、「尚方」から独立した工人が中国各地で製作を展開していったと想定されている〔岡村 2017 など〕。

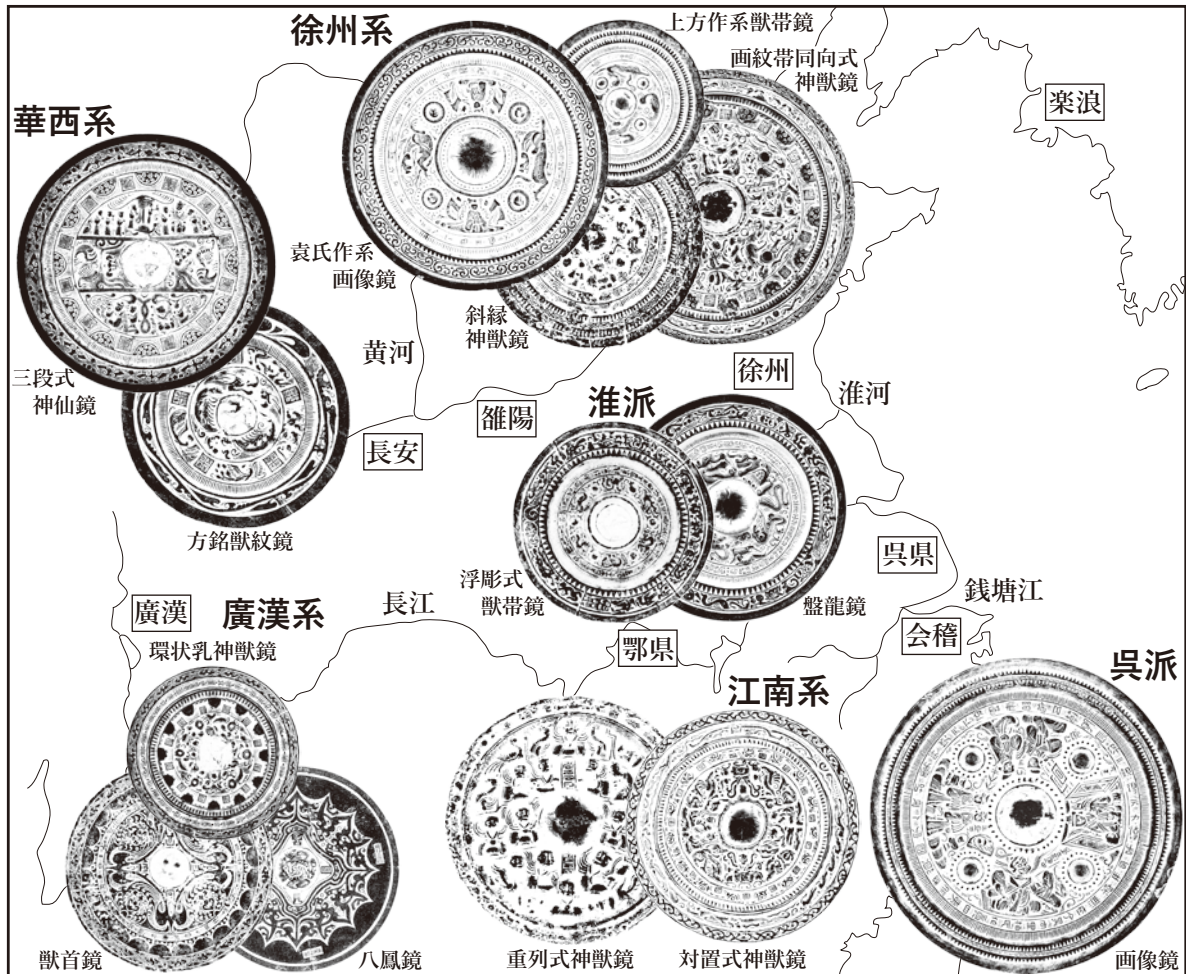


図1 後漢鏡の製作系統概念図 (鏡のみ S = 1/5)

**【漢鏡5・6期】**

淮派：漢鏡5・6期に、淮河流域の現在の安徽省寿県（旧淮南国）を中心に活動していたと考えられる。主に盤龍鏡や浮彫式獸帶鏡などを製作し、外区画像紋に三足鳥・九尾狐・双魚などを採用する特徴をもつ。「青蓋」・「(淮南)龍氏」・「池氏」などが活動していたと考えられる。初めに「尚方」から「青蓋」が独立し、浮彫表現を創出した過程が復元されている [岡村 2010・2012・2017] (図2 - 1)。

呉派：漢鏡6期を中心に、長江下流域の江蘇省蘇州市（旧呉県）で活動していたと考えられ、錢塘江下流域の浙江省紹興市（旧会稽郡）から大量に出土する。上野分類による広画面式画像鏡を主体とするが [上野 2001]、淮派との交流のもと盤龍鏡や浮彫式獸帶鏡も製作する。画像鏡は銘帯をもたず、内区図像の隣に榜題を付す特徴をもつ。「呉郡朱師」・「栢氏」などが活動していたと考えられる [岡村 2010・2012・2017] (図2 - 2)。

**【漢鏡7期】**

廣漢系：紀年銘から105年に出現し、いったん動向は不明になるものの156年に再興し以後、隆盛を極めたが190年頃には活動を停止していたと考えられる。四川省の廣漢市周辺（旧廣漢郡）で活動していたと考えられるが、製品は当地から出土せず全国各地から出土す

る。環状乳神獸鏡、獸首鏡（廣漢系 [馬淵 2017]）、八鳳鏡、双頭龍紋鏡（Ⅰ式 [西村 1983]）などを挙げられる。鈕紋様をもつ鏡はこのグループに限定される [鶴島 1991、原田 1997・2005]。製作主体は「廣漢西蜀」（もしくは「尚方」）と考えられ、官営か民営かは見解が一致していない [檜山 2017 ほか]。廣漢郡で発明された神獸鏡は、のちに江南や徐州へ展開し、配置を変えた様々な神獸鏡が製作される（図 2 - 3・4）。

華西系：2世紀中葉に四川省の成都市周辺（旧蜀郡）で出現し、2世紀後半には陝西省の西安市周辺（旧長安）に移動し、3世紀前葉に終焉していたと考えられる。三段式神仙鏡、方銘盤龍・獸紋鏡、獸首鏡（華西系 [馬淵 2017]）などを挙げられる。縁の傾斜端面が緩やかな特徴を持つ。当初は「余造」「九子家」「黄盖」などを自称していたが、次第に「九子」「三王」を名乗る [森下 2011・2012、森下・黄編 2016]（図 2 - 5・6）。

江南系：廣漢系・華西系の製品・工人が東伝したことを契機に、遅くとも 180 年代には製作が始まっていたと考えられる。江蘇省蘇州市や浙江省北部の紹興市で活動していたと考えられ、長江中下流域・錢塘江流域から出土する。環状乳神獸鏡（Ⅲ A・B 式 [上野 2000]）、重列式神獸鏡（Ⅰ・Ⅱ式 [上野 2000]）、対置式神獸鏡、八鳳鏡（凹帯式 [岡村 2012]）を挙げられる。外区に銘帯をめぐる事が多い。「示氏」重列式神獸鏡、「九子」対置式神獸鏡や、「張氏元公」による各種神獸鏡がある。「九子」らの銘文が共通しているように、華西系の工人もしくは製品が移動したと考えられている [森下 2012、岡村 2022 など]（図 3 - 1・2）。

徐州系：淮派・呉派の画像鏡・獸帯鏡との前後関係をもとに、漢鏡 7 期を中心に活動していたと考えられる。製作地は山東省南部～安徽省北部の徐州市周辺（旧徐州）に想定される。徐州系は鏡式ごとの研究が進んでおり、袁氏作系画像鏡 [森下 2014、馬淵 2024]、飛禽鏡 [実盛 2015、宇垣ほか 2024]、上方作系獸帯鏡 [山田 2005、実盛 2015、馬淵 2023 など]、画紋帯環状乳（Ⅱ C 式 [上野 2000]）・同向式神獸鏡（Ⅰ式 [上野 2000]）、斜縁神獸鏡 [村松 2004、実盛 2009・2012、馬淵 2022] を挙げられる。隅丸長方形の鈕孔形態が鏡式を横断して共通する可能性をもつ。徐州系は北部の「袁氏」「上方」（A 系統 [森下 2011]）、南部の「劉氏」らの神獸鏡（C 系統の一部 [森下 2011]）など、小系統に細分できる [岡村 2017、森下 2007・2011、馬淵 2024]（図 3 - 3～6）。

### 【三国・西晋】

魏晋鏡：森下のいう華北系（双頭龍紋鏡Ⅲ式 [西村 1983]）と華北 - 北部系（魏晋規矩鏡・関連鏡）を一括し [森下 2007]、魏晋鏡と呼称する。面径や紋様から魏鏡と西晋鏡を大まかに区別できるが、製作技術の点では共通点が多いため、系統の観点ではまとめた。魏の成立は 220 年だが、紀年銘によると 235 年以降に魏鏡が現れる。華北系は洛陽・西安市などの華北の中心都市から、華北 - 北部系は北京市から遼陽市にかかる渤海沿岸から出土する傾向がある。魏は規矩鏡、細線式獸帯・鳥紋鏡、獸首鏡、西晋は内行花紋鏡、双頭龍紋鏡、先述の小型鏡を挙げる。縁端面を小刀で削ったような、表面が波打つ荒い研磨をもち、長方形の鈕孔が多い [福永 2005、岩本 2020 ほか]。魏鏡には「右尚方」「顔氏」などの製作者が存在する（図 4 - 1～4）。



図2 後漢鏡の諸例①

淮派 1:「隆帝章和時(87~88)」「淮南龍氏」盤龍鏡、吳派 2:「建初八年(83)吳朱師」画像鏡、  
 廣漢系 3:「延熹二年(159)」「廣漢西蜀」環狀乳神獸鏡、4:「延熹三年(160)」「尚方」「廣漢西蜀」獸首鏡、  
 華西系 5:「余造」「九子」三段式神仙鏡、6:「九子家」方銘盤龍座獸紋鏡



図3 後漢鏡の諸例② 江南系 1:「建安元年(196)」 「示氏」重列式神獸鏡、2:「九子」對置式神獸鏡、徐州系 3:「袁氏作」画像鏡、4:「上方作」獸帶鏡、5:「吾作」画紋帶同向式神獸鏡、6:「吾作」斜縁神獸鏡



図4 三国・西晋鏡の諸例 魏鏡 1:「青龍三年(235) 顔氏」方格規矩四神鏡、2:「甘露五年(260) 右尚方」獸首鏡、  
 西晋鏡 3:鳥紋鏡、4:双頭龍紋鏡、吳鏡 5:「黄初二年(221)」楊州会稽山陰師蔭豫」同向式神獸鏡、  
 6:「太平元年(256)」對置式神獸鏡



呉鏡：呉の領域内で製作されたと考えられる鏡を包括する。呉の成立は222年だが、紀年鏡によると216年以降に後述の特徴を備えた鏡が増加する<sup>(3)</sup>。呉前期の紹興市周辺の会稽派と、呉後期の蘇州市周辺の呉派を主体とする。江南系と同様の地域から出土するが、湖北省東部の鄂州市（旧武昌）での出土量が増える。対置式神獸鏡（Ⅲ式 [上野2000]）・同向式神獸鏡や宝珠座八鳳鏡を挙げられる。鑄造技術が優れず、紋様や鏡体が崩れた製品が多く、仕上げの研磨もほとんどされない。円形の鈕孔が多い。「会稽山陰師蔭豫」、「鮑唐」などを挙げられる（図4-5・6）。

現状では、「派」「系」「鏡」と名称設定に一貫性のないことに問題があり、とくに三国・西晋鏡の型式名を「鏡」とするのは不相当と考えられるが、呉鏡を代替する名称が「呉派」「江南系」と既に存在するため、本稿では「呉鏡」という語句を用いる。

## 2. 後漢・三国・西晋鏡の組成と特色 洛陽・武昌・楽浪・倭を事例に

編年・系統という観点から後漢から西晋鏡にかけての整理と定義をおこなった。以下では、ここで設定した定義に基づき、中国で銅鏡がまとまって出土した代表的な都市ごとに、出土鏡の組成（製作時期・鏡式・系統・面径など）を確認し、日本列島から出土した鏡と比較する。

日本列島に流入した銅鏡がいつどこからもたらされたのか。現状では、漢鏡5期～7期にかけて鏡の出土数が楽浪郡と倭（九州以東）で似たような推移をたどるため、楽浪郡を「唯一の窓口」として銅鏡を含む大陸の器物を輸入していたと理解されている [岡村1993ほか]。日本から出土する漢鏡は徐州系鏡群で占められており、徐州地域で製作された鏡が楽浪郡を経由して日本列島に流入する「徐州-楽浪-日本」のルートが構築されていたと考えられている [森下2007ほか]。

**対象都市・資料と方針** 歴史的背景や現在の出土状況を考慮し、本稿では洛陽・武昌・楽浪を対象都市とした。洛陽は本稿で扱う王朝の都であり、倭の遣使の記事をふまえると、倭人が洛陽の鏡を入手した可能性が高い。一方、呉の工人が日本に渡来して三角縁神獸鏡を製作したという説があるように、江南地域の状況も看過できない [王1981]。ただ、呉の都である建業（現南京市）は洛陽・楽浪ほど銅鏡が出土しないため比較には不相当で、後漢・呉鏡が大量に出土する武昌（現鄂州市）を対象にした。これに、日本列島への銅鏡の流入を検討するには不可欠な楽浪を加えた三都市では、図録等で後漢～西晋の出土鏡がある程度集成されており、写真も公開されている。数量も200～300面でほぼ一致しており<sup>(5)</sup>、三都市とも図録刊行以降にまとまった出土鏡の報告もないため、ここで示した数的傾向が今後大きく変わることはないと考えている。

対象とするのは漢鏡5期から西晋期の鏡で、別途、漢鏡5期に製作が継続した漢鏡4期の方格規矩四神鏡や細線式獸帯鏡、および東晋鏡の可能性も指摘される一部の神獸鏡・方格T字紋鏡・唐草紋鏡など、前後の時期で関連の深いものも対象に含めた。これらの鏡について、年代・鏡式別の割合をグラフで提示する。ただし、淮派や徐州系などの系統は分類が困難な資料が多かったため、ここでは鏡式の割合のみを提示する。系統と鏡式はある程度対応しているため、大まかな傾向は把握できると考えられ、グラフに示していないが重要と判断した資料については適宜本文で補う。

## (1) 洛陽

後漢末から三国時代の混乱期には短期間で遷都することもあったが、後漢・魏・西晋の都であった洛陽（後漢のみ雒陽と表記）は当時を代表する都市であり、出土鏡は華北、あるいは後漢から西晋にかけての鏡の特色を反映していると考えられる。多くの身分の高い人々が生活していたことから、優品も多く流通していたはずである。

資料は2013年に出版された『洛鏡銅華』の上冊図版部分と下冊巻末に付された資料編「洛陽出土銅鏡資料長編」の遺跡<sup>(6)</sup>を対象とした(N=210)[霍・史編2013]。図が省略されているものは、引用された参考文献を参照し補った。なお、本図録のいう「洛陽鏡」は洛陽市区の遺跡と墓葬から出土した銅鏡を指す。

**歴史的背景** 王莽による新が崩壊した25年に後漢が興り、都は長安から雒陽へ移され、光武帝により復興する。洛陽は黄河中流域に位置し、洛水のほとりに営まれ、北に邙山が位置し、周辺に多数の墳墓を築いた。

おおよそ200年弱に中華世界の中心地として栄えたが、外戚・宦官勢力などによる政治的腐敗から、桓・靈帝の頃(146～189年)に政治は乱れ、黄巾の乱(184年)発生の要因となった。この時期の雒陽は董卓の支配下であり、190年には少帝が殺害され、後漢は事実上崩壊していた。董卓は翌年、袁術・孫堅らの率いる反董卓連合軍に敗北し長安に逃れたが、撤退の際に宮城へ火をつけたため、雒陽城は灰燼に帰したとされる。その後、曹操が許昌に都をおいた時期に雒陽の復興も進められ、226年には洛陽と改称し魏の都となった。人口の回復状況は不明であるが、漢王朝の正当な後継者を自称する魏にとって、洛陽復興の優先順位は高かったと考えられる。そして、西晋の武帝司馬炎の治世によって再び繁栄を極めたが、八王の乱によって弱体化し313年に洛陽が陥落する。

**出土鏡組成(図5)** 鏡の年代をみると、各時期の漢鏡がまんべんなく出土している。方格規矩鏡と細線式獸帯鏡に限定した漢鏡4期もある程度出土しているため、本来はより多くを占めると考えられる。漢鏡7期は八鳳鏡や獸首鏡などの第1群に集中し、第2・3群はほとんど存在しない。そのほかの地域に比べて魏晋鏡の占める割合が多いが、詳細は次で触れる。

鏡式をみると<sup>(7)</sup>、後漢鏡の方格規矩鏡・内行花紋鏡、魏晋鏡の双頭龍紋鏡がほとんどで、華北に多い線彫・平彫の鏡式で占められる。数点の盤龍鏡を除くと、神獸鏡などの浮彫の鏡式はほとんど出土していない。この盤龍鏡は上野のいう三輔系に相当し後漢末～西晋の長安で作られた可能性が高い[上野2005]。漢鏡4・5期以来の尚方の製品や、漢鏡7期の廣漢・華西系など西方の製品が多く、淮派・呉派・江南系など南方由来の製品はほとんど存在しない。西晋鏡の代表鏡式である双頭龍紋鏡の多さが際立っており、周辺に位置する鄭州、鞏義出土鏡を加味すると、魏晋鏡の割合はさらに増える。魏晋墓の報告が増えている西安・北京・瀋陽周辺と比較する必要があるが、洛陽は魏晋鏡製作地の有力な候補である。

漢鏡7期2・3群の少なさは、漢鏡6期における尚方工房の凋落や、漢鏡7期の洛陽の荒廃と対応関係にある。ただし、直径20cmを超える大型方格規矩鏡や精緻な画紋帯同向式神獸鏡も存在しており、都として優品が流通していたことも確かである。洛陽の復興は三国魏が都を洛陽に戻し

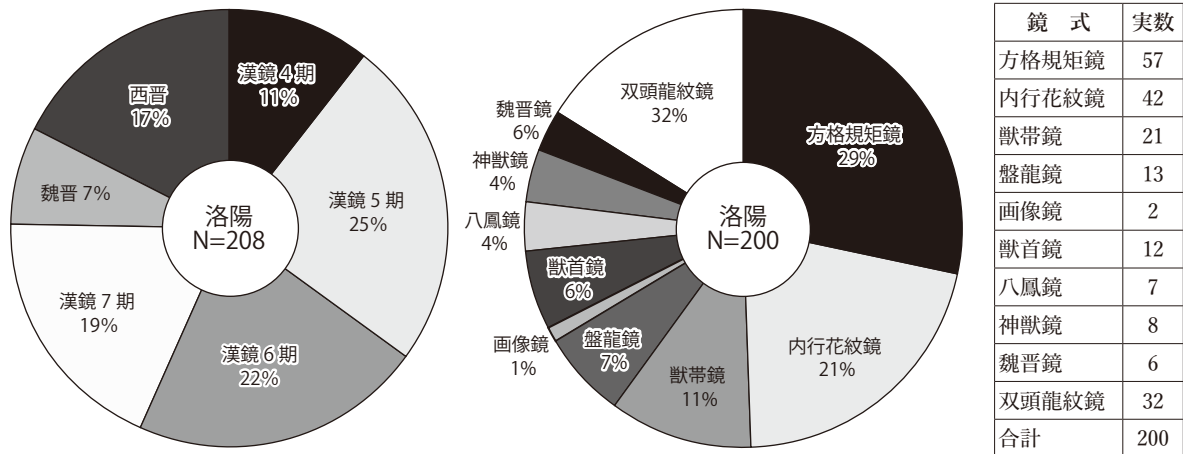


図5 洛陽出土鏡 時期・鏡式別組成

た226年以降であり、西晋武帝の時代には領土が拡張し栄華を極め、それにともなって多くの西晋鏡（双頭龍紋鏡）を副葬されるようになったのだろう。

**鉄鏡の流行** 洛陽からは鉄鏡が大量に出土しており、注目に値する。後漢～西晋墓出土鏡に限定すると104面確認されており、鉄鏡が最も多く出土する地域と評価されている〔洛陽市文物考古研究院編・趙主編2023〕。趙暁軍の研究によると、洛陽焼溝漢墓編年の後漢中後期から鉄鏡の増加傾向を確認できる。銹に覆われているため鏡式を判断できない資料が多いが、X線画像で確認できるものは全て内行花紋鏡と八鳳鏡である（図6）。内行花紋鏡は銅鏡と同じ傾向である。洛陽出土銅鏡に占める八鳳鏡の割合はあまり高くないが、八鳳鉄鏡の存在をふまえると、鏡式の視点では多くの八鳳鏡が流通していたといえる。また、後漢には16cm以上の大中型鏡が多く、20cmを超える製品も散見するが、魏晋になると15cm未満の中小型鏡が多くなる。これは西晋代に双頭龍紋鏡などの小型鏡が増加する銅鏡における現象と軌を一にするだろう。

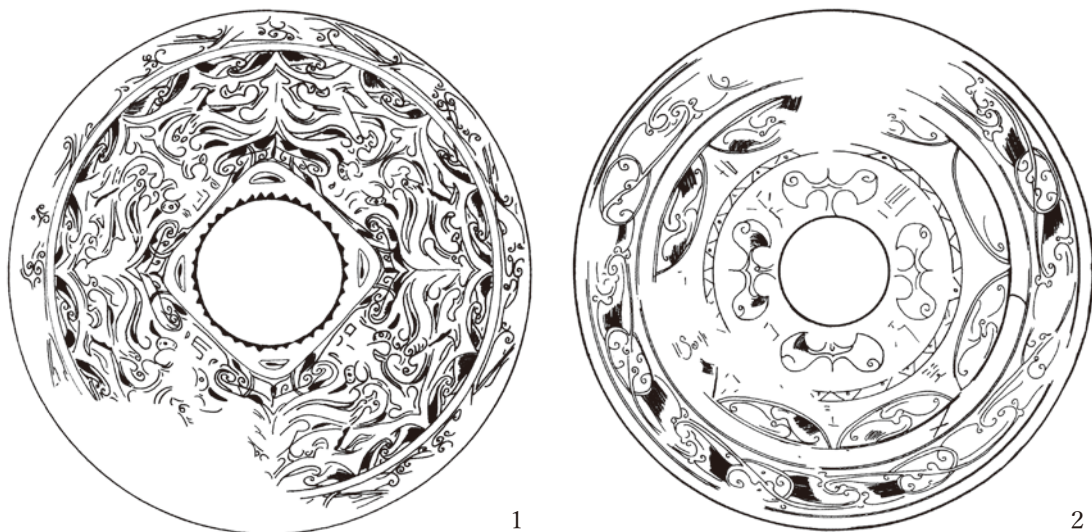


図6 洛陽出土鉄鏡の諸例  
（1八鳳鏡：洛陽機車廠生活車間 C5-195 号墓、2内行花紋鏡：洛陽機車工廠 C5-346）

鉄鏡の出土状況で特異な点は、大型墓から大型金銀象嵌鉄鏡が出土することである〔趙 2023〕。これは、196年に魏武帝（曹操）が献帝へ献上した物品リスト「魏武上雑物疏」に、身分に応じて象嵌の種類・大きさ・面数に差をつけた鉄鏡を献じた記述<sup>(8)</sup>があることから、後漢末期には既に鏡の序列があったという考えと対応するだろう〔岡村 2017 など〕。なお、徐苹芳は華北で鉄鏡が流行した要因に、古くより銅鉞は長江流域に位置し、三国時代の分裂によって魏晋では銅が欠乏したために鉄鏡が流行したと解釈する〔徐 1984〕。趙は洛陽の後漢・魏晋墓でも継続して銅鏡が出土することから、徐ほど洛陽での鉄鏡の隆盛を評価していないが〔趙 2023〕、他地域よりも鉄鏡の比率が突出する現象は重視する必要があるだろう。

## （2）武昌

短期間だが呉は武昌に都を置いたため、江南の代表都市と評価できる。出土鏡は華南、あるいは呉鏡の特色を反映していると考えられる。六朝の都として栄えた建業（東晋以降は建康、現南京市）や、南朝の斉・梁皇帝陵が多数造営された朥陽県（現丹陽市）からは、武昌ほど銅鏡が出土しておらず、東晋以降の南朝鏡は不明な点も多い。

対象資料は『鄂城三国六朝銅鏡』〔湖北省博物館・鄂州市博物館編 1986〕・『鄂州銅鏡』〔鄂州市博物館 2002〕図録に掲載される（N = 261）。本図録は鄂州市全域を対象としているものの、ほとんどの出土地点は旧武昌城・西山周辺であるため、六朝武昌の実態を反映しているだろう。大規模な工場建設によって墓葬の実態がほとんど分かっておらず、中には採集品も含まれているが、出土地点の判明している資料は多い。

**歴史的背景** 現在の長江中流域にある湖北省鄂州市に位置し、漢代には江夏郡鄂県が置かれた。長江に面して六朝武昌城があり、西側に西山が位置する。『鄂城六朝墓』によると、多くの銅鏡は西山東嶺で見つかっており、南側の平地にある五里墩・七里界などの墓区からも出土している。武昌城内やその周辺では出土量が少ない〔南京大学歴史系考古專業ほか編 2007〕。洛陽北郊の邙山には多数の墳墓が築かれたように、武昌では西山がその役割を果たしたのだろう。

221年に孫権が公安（現湖北省公安県）から遷都し、名称を鄂県から武昌へ改めた。同年に孫権は呉王に封じられ、武昌城（呉王城）を建設する。229年に皇帝を称した孫権は建業へ遷都したが、その後も武昌に太子の孫登を置いて陸遜に補佐させ、陸遜の死後も呂岱、諸葛恪、陸凱などの有力武将が任を継いだ。この間も都の建業に継ぐ都市として栄えたと考えられる。暴君と評価される末帝孫皓によって265年から266年12月の間に、再び建業から遷都された。279年に西晋の武帝司馬炎の征伐によって呉は滅亡するが、南朝最後の陳まで武昌城は存続する。南朝梁の陶弘景が記した『古今刀劍録』に「呉王孫権黄武五年（226）を以て武昌の銅鉄を採り、劍千口・刀万口を作る」とあり、鄂州市では銅の採掘・精錬遺跡<sup>(9)</sup>も見つかっていることから、周辺に銅鉞山を備え鑄銅をおこなっていたと考えられる。

**出土鏡組成（図7）** 鏡の製作年代をみると、漢鏡7期と呉鏡が突出している。呉鏡の多さは呉の繁栄と一致する。漢鏡7期鏡は後漢末の混乱期から孫権入植前に相当し、中原など他地域からの避難民流入による人口増加や、武昌城築城以前に都市化を進めていた可能性を想定できる。『鄂城

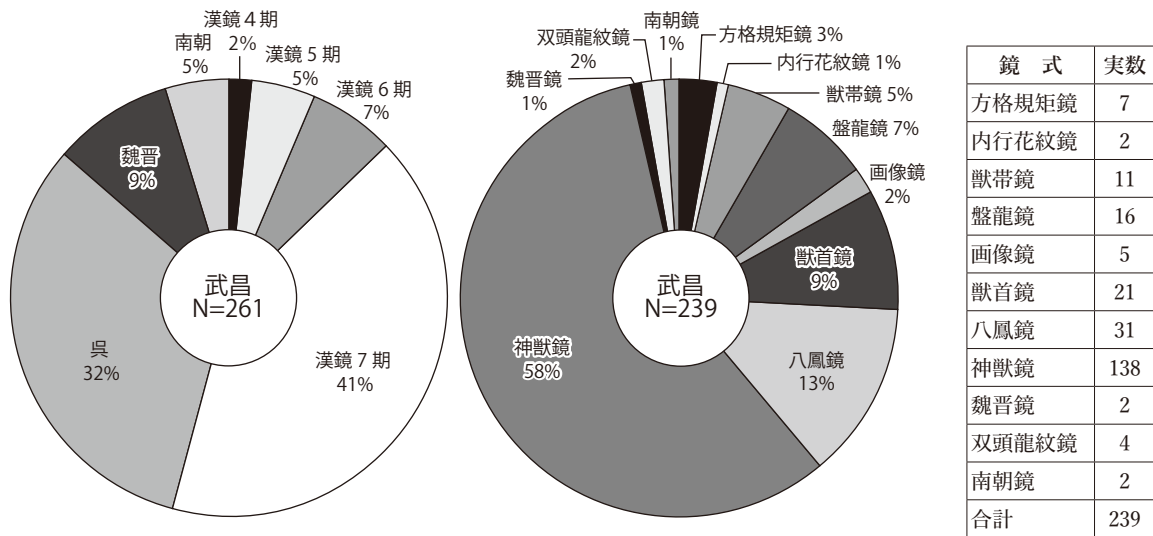


図7 武昌出土鏡 時期・鏡式別組成

六朝墓』では、後漢末（建安年間か）から黄武年間まで、後漢墓の伝統を引き継ぐ小型埴室墓が作られたとするが〔南京大学歴史系考古專業ほか編 2007〕、その根拠は後漢鏡の存在によるところが大きいと考えられ、その他の遺物や遺構からの検討はされておらず、考古学からの追究は今後の課題である。

漢鏡 7期・吳鏡の鏡式・系統をみると、神獸鏡が突出し八鳳鏡も多い。内訳をみると、環状乳 23 面、重列式 33 面、対置式 52 面、同向式 22 面となり、八鳳鏡の半数は吳の宝珠座八鳳鏡である〔秋山 1998〕。「建安」重列式神獸鏡や、「九子」・「三王」対置式神獸鏡も目立つ。これらは江南系・吳鏡の実態や、廣漢・華西系の工人・鏡群の東伝を反映していると考えられる〔上野 2001、岡村 2013、森下 2011 ほか〕。一方で、武昌とは関連の薄い徐州系・魏晉鏡も一定数出土しており、前者は徐州のなかでも江南に近い南部のものが、後者は西晋による中華統一以降に流入したと考えられる。

武昌出土大型鏡は盤龍座細線式・浮彫式獸帶鏡であり、他地域と鏡式が異なる。18～17cm 前後に対象を広げてみても、方格規矩四神鏡が 1 面追加されるだけで、他は対置式神獸鏡・宝珠座八鳳鏡などが増えることから、大まかな傾向は変わらない。大型鏡の面数も楽浪・洛陽が圧倒的に多く、面径からみても南北で大きな差を認められる。

**武昌の銅鏡生産** 武昌では銅鏡の出土量の多さと「武昌作」の銘文をもつ鏡の存在や鑄銅遺跡の存在から、当地での銅鏡生産を想定されている。

建安年間の紀年をもつ「示氏」重列式神獸鏡が大量に出土することから、後漢末から銅鏡生産が始まっていた可能性が考えられる。これらは浙江省北部からも出土しており、上野は会稽から武昌へ生産の中心地が移ったとする〔上野 2000・2001〕。長江・錢塘江流域に位置する江夏郡・吳郡・会稽郡では人と物の活発な交流があったと考えられ、現状ではどちらで生産されていたかは判断し難い。

「黄初二年」(221)「武昌作」の銘文をもつ同向式神獸鏡は会稽派に位置づけられており、この時期にはその工人が武昌で鏡作りをしていたと考えられる〔王 1987、岡村 2013〕。これらの他にも銘帯を省略し、吳鏡に特徴的な大きく扁平な鈕をもち、その側面に複数の面をつくる荒い研磨を施



図8 武昌製作鏡の諸例（1:「黄初二年(221)」「武昌所作」同向式神獸鏡、2:1963年8月鄂州市西山出土獸首鏡）

した獸首鏡が武昌から複数出土しており、他の地域では確認できないことから、これらは在地生産されていた可能性が高い（図8）。いずれも呉鏡の特徴を備え、三国呉の武昌では銅鏡生産がおこなわれていたのだろう。

### （3）楽浪

朝鮮半島北部に位置する楽浪は、大陸と列島を結ぶ重要な中継地であり、日本列島出土鏡と共通する時期・製作地の鏡で構成され、漢鏡5・7期、徐州系鏡群が多いと考えられる。この他にも、これまでの研究で述べられてきた事象を再検証してみたい。

資料は『梅原考古資料目録 朝鮮之部』[東洋学術協会1966]をもとに作成・公開された公益財団法人東洋文庫「梅原考古写真資料庫(朝鮮之部)」データベースに画像があるものを対象とした(N = 278)。不鮮明な画像や面径・出土地などの情報が欠けていた場合は原報告にあたって補った。

**歴史的背景** 漢代に現在の平壤市大同江沿いに楽浪土城が建設された。その南側の丘陵地帯には楽浪漢墓が築かれ、ここから多数の銅鏡が出土している。

前2世紀には衛氏朝鮮が治めていたが、衛右渠の頃に漢王朝に反発すると、前漢武帝の領土拡張政策のもと荀彘・楊僕らが派遣されて滅亡し、前108年に楽浪郡が設置される。王莽の頃に楽鮮郡と改称し王調の独立政権も興るが、30年に後漢の光武帝によって復帰する。後漢末の204年頃に楽浪郡の南に分置された帯方郡は、現在の黄海道に所在したとする説が有力である。なお、189年～238年頃は公孫氏政権の影響下にあったと考えられている。西晋滅亡の要因となった八王の乱によって衰退し、313年に高句麗の侵攻を受けて滅亡する。

前漢代に並行するような古い墓葬には、中原にない独特な武器・車馬具を副葬するなど朝鮮半島の地域色が強いが、1世紀以降は漆器・銅鏡・漢式の車馬具などが増え、楽浪官人の漢化が進んでいったと判断できる [大阪府立弥生文化博物館1993など]。

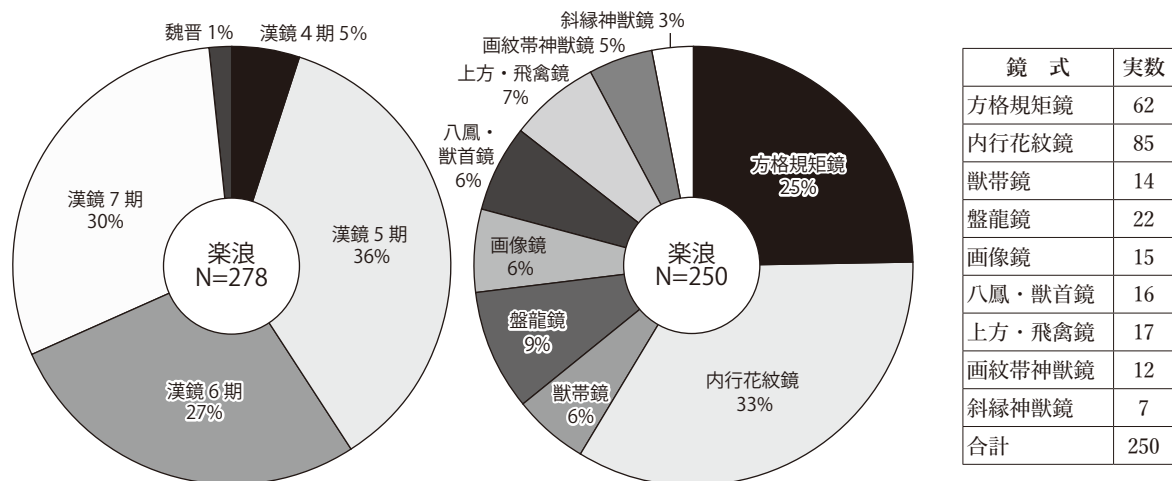


図9 楽浪出土鏡 時期・鏡式別組成

**出土鏡組成 (図9)** 時期別にみると後漢鏡に集中しており、漢鏡5～7期がまんべんなく出土するが、漢鏡6期はやや少ない。岡村がかつて示したグラフでは漢鏡6期の数量はより少なかったが [岡村 1993・1999]、近年の研究では漢鏡6期に含まれる画像鏡・獸帶鏡などが増えたため、数量も変化したと考えられる。三国・西晋鏡がほぼ存在しない点は、洛陽・武昌・倭の組成と大きく異なる。「楽浪漢墓」と呼称されるように、楽浪郡は漢墓が主体であったと考えられるが、帯方郡故地と目される黄海道から魏晋の紀年銘埴が30例ほど出土しており、魏晋墓も継続して築造されていた可能性が高い<sup>(10)</sup>。にもかかわらず魏晋鏡がほとんど出土しておらず、楽浪地域で銅鏡の流通に大きな画期があったことがうかがえる。

時期ごとの後漢鏡の組成は洛陽・倭と近似するが、漢鏡5・6期で内行花紋鏡の多い傾向は洛陽と異なり倭と共通する。近接する徐州系鏡群や、遠隔地である廣漢系鏡群がある程度出土することも倭との共通点である。徐州系鏡群は従来指摘されているように、上方作系獸帶鏡・飛禽鏡・画紋帶神獸鏡など、徐州・倭から出土する代表的な鏡式が多い [森下 2007 ほか]。紀年銘をもつ廣漢系鏡群の獸首鏡は南陽・武昌・楽浪といった限られた地域からしか出土しておらず、楽浪漢墓からは「廣漢西蜀」銘の漆器も複数みつがっている。これらは高位の者を含む多くの楽浪官人の需要<sup>(11)</sup>を満たすために遠く離れた廣漢郡からもたらされたと考えられる。なお、楽浪では淮派の鏡や江南のタイマイ・刻紋青銅器も出土しており、これらは海路でもたらされたと考えられている [岡村 1995]。呉の公孫氏への遣使と関連する可能性もあり興味深い。いずれにせよ、洛陽・武昌と比較して様々な地域の後漢鏡があることに楽浪の特色を見出せるだろう。

楽浪出土鏡は対象の半数程度しか面径が分からなかったが、直径20cmを超す大型の方格規矩四神鏡・内行花紋鏡は洛陽でも出土しており、同地からもたらされたと考えられる。報告者の梅原未治は内行花紋鏡に優品が多いと感じたようで、大きさや鑄上りを称える記述も散見する [梅原 1924]。数は少ないが獸帶鏡・画紋帶神獸鏡も含まれる点は注目できる。方格規矩鏡は総数の割に少ない。

(4) 倭

これまでの指摘通りであれば、楽浪と出土鏡の組成は共通すると考えられる。下垣仁志による『列島出土鏡集成』[下垣 2016]のうち後漢～西晋鏡を抽出したが、数量が多かったので、沖縄を除く九州 (N = 312) と日本海側を除く近畿 (N = 254) に分けた。楽浪でみたように、時期別のグラフは岡村の研究と大きく変わらないので倭では省略する [岡村 1999 ほか]。

**歴史的背景と対外交渉** 北部九州のクニグニ、もしくは奈良盆地のヤマト政権が主体となって対外交渉をおこなっていた。特に、中元二年 (57) の奴国遣使の記事や、三雲南小路遺跡出土品などのように、この時期の北部九州は、諸侯が副葬するような器物を大陸から直接入手していたと考えられている。永初元年 (107) には倭国王帥升が安帝に謁見を願い出ており、この時期にも大陸系器物流入の契機はあったのだろう。後漢後期に相当する「倭国大乱」の時期の対外交渉はよく分かっていないが、卑弥呼・台与らによる景初二年 (239) から泰始二年 (266) の遣使では、交渉相手が漢から魏晋に変化しており、入手した銅鏡も魏晋鏡が主体であったと想定できる。

**出土鏡組成 (図 10・11)** 後漢鏡の年代・鏡式は楽浪と近似するが、魏晋鏡の有無が大きく異なる。徐州系鏡群が大多数だが、廣漢系も一定数存在するとともに、洛陽・楽浪にない江南系・呉鏡を複数含み、さらには三都市いずれにも存在しない華西系まで出土している。漢・三国・西晋鏡における出土中国鏡の多様性は、楽浪含む中華世界の周縁地域の中で突出しており、倭の特色といえるだろう。出土鏡式をみると、近畿が画紋帯・斜縁神獣鏡、九州が方格規矩鏡で優位である。弥生時代には北部九州で漢鏡 4・5 期を代表する方格規矩鏡が、古墳時代になると近畿で漢鏡 7 期を代表する神獣鏡が大量に副葬されたという、従来の指摘を反映していると考えられる [岡村 1999 など]。

また、倭では 20cm 以上の大型鏡が珍重され、重要な墳墓から出土している。製作時期・地域に諸説ある平原墳墓出土鏡は別にして、大型鏡は近畿優位の傾向を認められる。大型後漢鏡の副葬をみると、九州では弥生時代の遺跡としては、桜馬場遺跡 1 号甕棺出土方格規矩四神鏡 (23.2cm)、中原遺跡 ST13414 墳丘墓出土内行花紋鏡 (20.7cm) の副葬があるものの、古墳時代以降の遺跡が

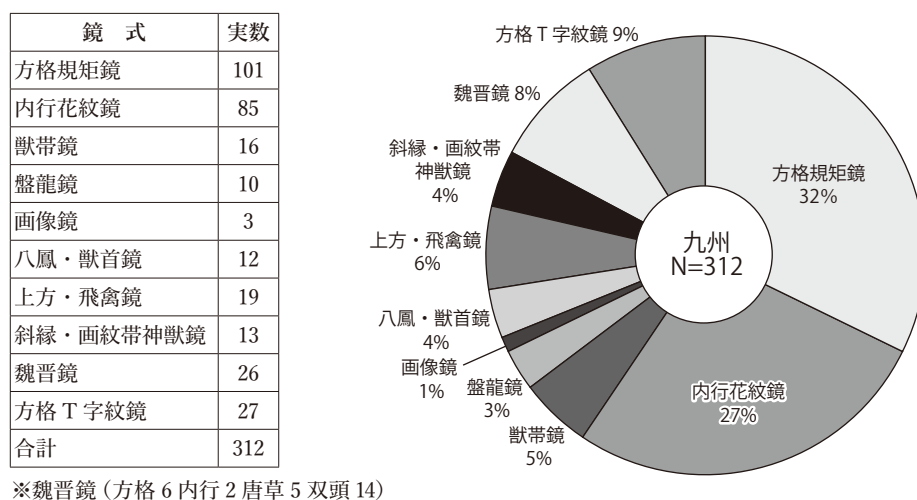
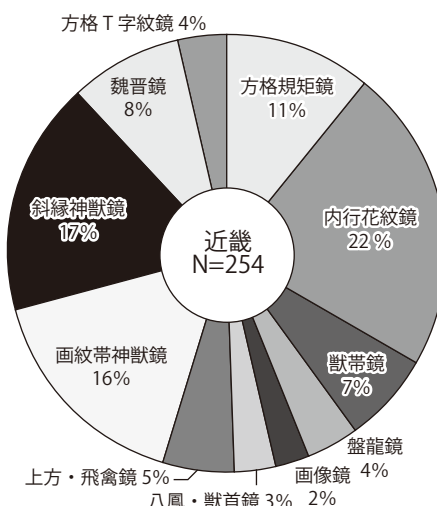


図 10 列島出土鏡 鏡式別組成 (九州)



鏡式	実数
方格規矩鏡	28
内行花紋鏡	57
獸帯鏡	17
盤龍鏡	10
画像鏡	6
八鳳・獸首鏡	8
上方・飛禽鏡	13
画紋帯神獸鏡	41
斜縁神獸鏡	44
魏晉鏡	21
方格T字紋鏡	9
合計	254



※魏晉鏡(方格8内行2唐草4双頭4神獸3)

図11 列島出土鏡 鏡式別組成(近畿)

多くを占める。近畿では弥生時代遺跡からの出土例を見つられていない。古墳時代になると紫金山古墳出土方格規矩四神鏡(23.8cm)、椿井大塚山古墳出土内行花紋鏡(27.8cm)をはじめ著名な例の他にも散見する。大型方格規矩・内行花紋鏡は洛陽と楽浪で出土しており、両地域からもたらされたと考えるが、これらは遣使などの特別な契機でもたらされた可能性もあり、本稿で想定する「流通」とは別に理解する必要がある。

**桜井茶白山古墳出土鏡の特色** 近年、奈良桜井茶白山古墳から出土した鏡片の詳細な報告が行われ、中国鏡53面、三角縁神獸鏡26面、倭鏡21面の計103面以上の銅鏡が副葬されたと判明した[岡林・東影編2024]。

森下の指摘によると、神獸鏡は環状乳、同向式、対置式など各種の型式を完全に揃える点や、大型鏡(飛禽鏡・双頭龍紋鏡など小型鏡を含まない)や精緻な鏡(高く細かな浮彫の盤龍鏡・神獸鏡)を揃えようとした点を桜井茶白山古墳出土中国鏡の特徴とする[森下2024]。改めて各地域のグラフと比較すると、八鳳・獸首鏡、魏晉規矩鏡がない点や、ほぼ半数を占める神獸鏡の高い割合も特

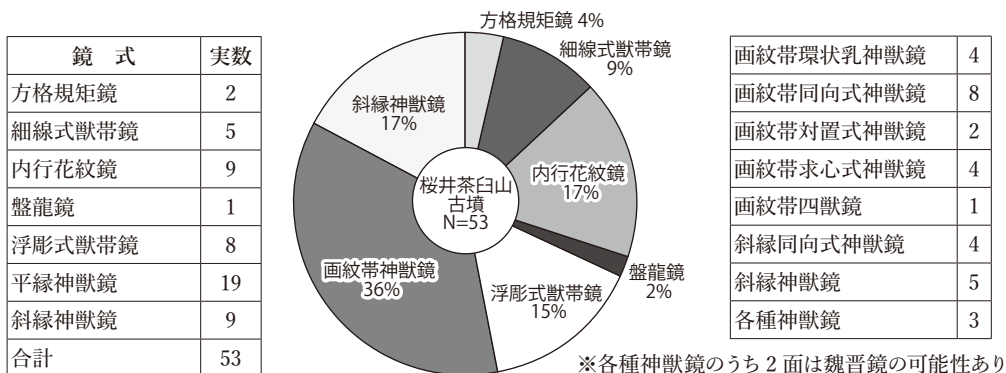


図12 奈良県桜井茶白山古墳出土 鏡式別組成

徴となりえるだろう（図 12）。三角縁神獸鏡・倭鏡を含めると、紋様面での神獸鏡および内行花紋鏡の割合はより突出することになり、古墳時代においてこの二つの紋様が熱望されたことを示す。

八鳳・獸首鏡、魏晉規矩鏡の有無が何を反映しているかの判断は難しいが、神獸鏡は数量のわりに江南系・華西系が僅かで、ほとんど徐州系で統一されていることに注目できる。廣漢・華西系鏡群は日本海沿岸から、魏晉鏡は九州と日本海沿岸から多く出土する傾向が指摘されており〔岡村 2022、辻田 2007、村瀬 2014、森下 2003 など〕、瀬戸内海を經由して大和盆地にもたらされたものとは別の経路があった可能性を示唆する。

### 3. 倭における鏡の受容と画期

前節で中国の三都市と日本列島の後漢～西晋鏡の組成を、年代・鏡式の点から確認し各地の特色を見出した。ここでは、銅鏡の組成以外の観点も含めて日本列島と中国大陸の鏡を比較することで、倭人が求めた鏡の具体像と入手方法について考察してみたい。

**求められなかった鉄鏡** 上野は河北定県北莊漢墓、甘肅武威雷台漢墓などの貴族墓、洛陽の燒溝・西郊の後漢後期の例を挙げ、「2世紀を境として、鉄鏡を銅鏡よりも上位とする価値が中国世界では定着した」という〔上野 2014〕。後漢代には、洛陽以外でも華北地域では鉄鏡を重視する価値観が形成されていた。武昌出土鉄鏡は3面しか確認できず〔南京大学歴史系考古專業ほか編 2007〕、いずれも西晋以降の墓葬で紋様は八鳳鏡と報告されており、西晋統一以降に華北から流入したと考えられる。楽浪出土鉄鏡は5面<sup>(12)</sup>で、銹のためいずれも鏡式は分からないが、突出する紋様はないとされる〔梅原 1924〕。中国ではそもそも鉄製品の図面を提示して報告することが少ないとはいえ、洛陽における鉄鏡の多さと三国時代以降の鉄鏡の価値の上昇は評価できるだろう。

日本の古墳時代遺跡の出土鉄鏡は9面あり、そのうち直径20cmを超えるものは大分県ダンワラ古墳・群馬県・岐阜県の3例あるものの、いずれも由来が不確かである（表1）。後漢・三国時代には相当量の鉄鏡が洛陽で流通していたはずだが、並行する弥生・古墳時代の遺跡では鉄鏡がほとんど出土していない。上野は北莊漢墓と平原1号墓を比較すると、銅鏡の構成は近似するが鉄鏡の有無に違いがあるとして、倭が鉄鏡を受け取る立場になかったと考える〔上野 2014〕。確かに、北部九州に玉璧がもたらされず、格の落ちるガラス璧が出土することをふまえると、辺境の倭が漢王朝に重視されていなかったとみることも可能だろう。しかし、洛陽である程度の階層まで鉄鏡が広がったのちに、日本へ鉄鏡が流入しなかった現象をふまえると、古墳時代前半の倭が銅鏡に固執したと理解する方が素直ではないだろうか。

出土地が明らかな鉄鏡は、百舌鳥大塚山古墳（1号槨）と百舌鳥古墳群から各1面出土していることに注目できる。とくに前者の径は14.5cmで特別大きな鏡とはいえないが、X線CT調査の結果、鏡背に浮彫と象嵌で唐代の雲龍鏡のような龍紋を配し、鏡面に象嵌で龍鳳をほどこす特異な鏡であることが判明したことから〔西山ほか 2021〕、未発掘の百舌鳥・古市古墳群の王陵には、より優品の鉄鏡がおさめられている可能性も高いだろう。これらは4世紀後半～5世紀後半の古墳中期の事例で、中国では南北朝時代に相当するため、入手の契機や倭における鉄鏡の価値は弥生終末期～古墳前期とは異なっていたと考えられる。

表1 古墳時代遺跡出土鉄鏡一覧

番号	鏡式	面径	遺跡・遺構名	墳形・時代
群馬 043	鉄鏡	不明	田中家屋敷内古墳（伝）	円
群馬 122	獣首鉄鏡	21.0	敷島長井（伝）	不明
岐阜 149	八鳳鉄鏡	21.2	名張一之宮神社古墳（宮の前古墳）（伝）	不明
大阪 206	龍鳳紋鏡	14.5	百舌鳥大塚山古墳	方円 168・中
大阪 223	鉄鏡	5.0	百舌鳥古墳群	方円 77
大阪 108	素紋鉄鏡	3.1	亀井古墳〔第1主体部〕	方7・中
奈良 325	銀象嵌鉄鏡	13.2	松山古墳（呑谷古墳）	方10・終末
香川 012	鉄鏡	約15	龍王山古墳	円 28×23・前
大分 080	金銀錯嵌珠龍紋鉄鏡	21.3	ダンワラ古墳（伝）	不明

表2 古墳時代遺跡出土呉鏡一覧

番号	鏡式	面径	遺跡・遺構名	墳形・時代
群馬 049	波紋帯対置式神獸鏡	14.5	岩鼻二子山古墳	方円 (120)・中
山梨 001	赤烏元年対置式神獸鏡	12.5	鳥井原狐塚古墳	円 (20)・中?
京都 225	銘帯対置式神獸鏡	13.0	上伯古墳（伝）※1	不明
兵庫 051	赤烏七年対置式神獸鏡	17.0	安倉高塚古墳	円 (17)・前?
兵庫 123	宝珠座八鳳鏡	19.0	奥山大塚古墳※2	円 (15)・中
和歌山 019	銘帯同向式神獸鏡か	不明	陵山古墳	円 (56)・後
岡山 051	銘帯対置式神獸鏡	12.0	庚申山古墳	不明
岡山 086	八鳳鏡片	不明	七つ埵1号墳後方部第1石槨	方方 (45)・前
愛媛 072-1	銘帯対置式神獸鏡片	不明	猿ヶ谷古墳群採集	不明

## 【関連鏡（後漢・西晋の江南の鏡）】

京都 187	九子作対置式神獸鏡	13.8	椿井大塚山古墳	方円 (175)・前
兵庫 032	吾作重列式神獸鏡	12.6	夢野丸山古墳	円 (18)・前
広島 111-1	宝珠座八鳳鏡	22.0	尾ノ上古墳	方円 (約60)・前
福岡 238	宝珠座八鳳鏡	約18	宮地嶽付近古墳（伝）（沖ノ島遺跡（推定））	不明
福岡 349	宝珠座八鳳鏡	22.1	沖ノ島17号遺跡〈21号鏡・17-1〉	祭祀・中
福岡 355	宝珠座八鳳鏡	破片	沖ノ島18号遺跡〈18-5-3〉	祭祀・前

※1：西晋元康年間銘の可能性あり。 ※2：同型鏡群の可能性あり。

卓越した副葬品で知られる韓国皇南大塚北墳、遼寧省北燕馮素弗墓出土鉄鏡も古墳時代中期以降の鉄鏡の流通に関わる資料だろう。

**呉鏡の流入経路** 洛陽・楽浪で見つかっていない呉鏡が日本列島から9例出土しており、紀年鏡も含まれていることは注目される（図13・表2）。現状では華北・朝鮮半島から呉鏡は出土しておらず、当時の交渉先であった洛陽や楽浪には呉鏡が存在しなかった可能性が高い。岩本の整理によると、日本出土呉鏡は3世紀第2四半期に集中し、3世紀第3四半期の製品は存在しないという〔岩本2024〕。こうした現象は、嘉禾二年（233）、孫権が魏の背後をつくために遼東の公孫淵を燕王に封じた時期と重なり文献と一致するかもしれない。一方で、日本から出土した呉の紀年鏡の年代（「赤烏七年」244年など）と公孫氏の滅亡時期（238年）とはずれがあり、公孫氏を経由して呉鏡を入手したとするにも問題がつかまとう〔辻田2019〕。



図13 列島出土呉・江南鏡の諸例  
 (1:兵庫県安倉高塚古墳「赤烏七年(244)」対置式神獸鏡、2:広島県尾ノ上古墳宝珠座八鳳鏡)

呉鏡の流入時期や政治的な器物といえるかは検討課題だが、日本から呉鏡が出土し、製作地と出土地の間に空白があることは確かである。こうした特殊な分布を踏まえて、呉鏡は直接日本へもたらされたとすることが多かったが、具体的な流入経路はほとんど検討されなかった。呉と公孫氏に関する記述をふまえるならば、長江下流域から海岸沿いに北上し、山東・遼東半島を經由して日本へ流入した可能性が最も高い。想定した中継地から出土していない状況からは、呉と倭の直接交渉<sup>(13)</sup>も想定できるが、鏡以外の考古資料を見出せないという課題もある [辻田 2019]。

また、呉滅亡後の江南製宝珠座八鳳鏡が福岡沖ノ島遺跡に集中している点に注目できる。これらも洛陽と楽浪では見つかっておらず呉鏡と同様の状況に置かれる。沖ノ島遺跡と近畿中枢の出土品は共通性が高く、倭王権の主導により国家的祭祀が行われていたと考えられている。沖ノ島遺跡成立期の鏡をみると、大型倭製方格規矩鏡・内行花紋鏡と終焉段階の三角縁神獸鏡が多くを占め、倭王権とその周辺に伝世していた鏡が一括して「奉獻」されたと指摘される [岩本 2023]。沖ノ島遺跡出土宝珠座八鳳鏡は斜縁と内向鋸齒紋を有する異例の特徴を備え、特定の鏡式が集中していることもふまえると、独自の流入経路を想定することも可能だが、20cmを超える大型鏡を主体とする沖ノ島祭祀において、同様の条件を備えた宝珠座八鳳鏡が選択的に配布されたとみておきたい。

**列島流入鏡と経路の変革に関する予察** 最後に楽浪と倭の関連鏡を比較し、後漢・魏晋鏡流入の画期を見てみたい。

後漢鏡は楽浪と倭の出土鏡に共通点が多いのに対して、洛陽・武昌との間には見いだせなかった。今回数量的に示すことのできなかつた西安(旧長安)・紹興市の資料を概観しても同様である。一方で魏晋鏡は楽浪でほとんど出土しておらず、倭は朝鮮半島を経ずに中国大陆から直接魏晋鏡を入手するようになったとみられる。その画期は、楽浪で出土鏡がみられなくなる3世紀第2四半期に「鏡の供給状況とそれにおいて楽浪郡の果たした役割に根本的な変化があったと考えられる」と明言されており [森下 1998]、本稿ではグラフを用いて視覚的に追認したと考える。



図14 華北-北部系鏡群の出土地(白抜は伝資料)  
(1:河南安陽市大司空村50号墓、2:遼寧北票市喇嘛洞採集)

卑弥呼により239年に派遣された使節たちが立ち寄った帯方郡にはほとんど鏡が存在しておらず、あったとしても伝世した漢鏡と少量の魏晋鏡のみであったろう。地理的に近い朝鮮半島南部も一貫して鏡の出土数が少なく、楽浪の代替にはなりえない[上野2019ほか]。一方、使節の最終目的地である洛陽から出土する魏晋鏡のほとんどは双頭龍紋鏡のため、数量を示した円グラフからは倭との共通性を見出しがたい。

近年の魏晋鏡研究の動向を踏まえるならば、森下のいう「華北-北部系」に該当する魏晋規矩鏡・関連鏡が、北京市周辺などの渤海沿岸から出土し、日本列島でも多く出土していることから、有力な候補となりえるだろう[森下2003・2007、岩本2020]。魏晋代、渤海沿岸の幽州(現在の河北省・遼寧省・北京市・天津市)をめぐる状況は安定に向かっていたことに注目できる。238年に司馬懿が公孫氏政権を倒し遼東・帯方・楽浪などを平定すると、東夷の魏への遣使が再開されたのである。さらに246年には幽州刺史の母丘儉が高句麗を征伐し、肅慎氏の南界(現在の琿春市付近)まで高句麗王位宮を追撃した。282年には、張華が持節・都督幽州諸軍事・領護烏桓校尉・安北將軍となり、幽州の異民族を懐柔し新たに「二十余国」を朝貢させた。現在の北京市には幽州治所の燕国と護烏桓校尉が置かれ、洛陽や長安などの中原地域から多くの人や物がもたらされたことで、3世紀後半には東夷世界への窓口の機能が楽浪から幽州へ移転していたと推測する。

魏晋規矩鏡類のうち、岩本編年の第1～4段階、5段階の一部、鳥像D系統は魏・西晋初頭の時期や、河北省に分布の中心がある製品と判断され、鳥像A2～5式とD系は、縞状紋様を充填した腹部と尾羽を一連で描き、蜂の腹部のようにみえる特徴を備える<sup>(14)</sup>。これらの出土地をみると、洛陽市やその北東の鞏義・鄭州・安陽市の河南省出土例が増えていることに注目できる(図14)。とくに、河南安陽市大司空村から北方異民族である鮮卑・扶余の遺物とともに出土している点は、遼寧北票市喇嘛洞採集例などの状況と一致しており興味深い。出土地の傾向として、北京市から河南省にかけて太行山脈の東側に沿った内陸から帯状に出土が目立つ点や、黄河下流域には少ないことも見逃せない<sup>(15)</sup>。依然として北京市周辺の出土例が多く、この地域で作られたとも考えられるが、洛陽周辺からもたらされた可能性も想定すべきだろう。

以上のように、考古資料からみると3世紀半ばの画期として、後漢鏡の「徐州 - 楽浪 - 日本」から、魏晋鏡の「洛陽 - 幽州 - 日本」という変化がみてとれる。廣漢・華西系や魏晋鏡の日本での分布状況をふまえると、九州や日本海側沿岸の勢力が大陸から独自に入手した可能性も想定できるが、日本列島内での出土状況とも関わるため、今後の課題としておきたい。

## おわりに

本稿で示した銅鏡の流通は、倭人が主体的に楽浪や幽州の市場で手に入れた製品の流通を想定しており、漢王朝・王莽による特別な下賜鏡や、特鑄（受注生産）説のある三角縁神獸鏡など、外交を通じて倭人が受け取った製品とは根本的に異なる志向性のものと考えている。こうした条件下で倭にもたらされた鏡は、後漢代には楽浪から入手していたが、魏晋代には幽州などの異なる地域に転じたことをグラフと地図を用いて示した。

今後中国大陸での魏晋鏡の出土事例を注視する必要があるが、漢魏王朝の交替が楽浪と倭に直接影響を与えたことは疑いなく、東アジア世界の流通網に大きな変革をもたらしたと考えられる。

## 注

- (1) 製作者・集団を包括するが、基本的にはひとつの地域に基づくまとまりを地域生産系統とみなす。同じ系統に位置づけられる製品は、鏡の紋様・銘文・製作技術などの特定の要素（特徴）が共通する。
- (2) 華西系・江南系の「九子」製品を「九子派」と、建安示氏銘の重列式神獸鏡を「示派」と呼び、徐州系の「袁派」「劉派」のように〔岡村 2017〕、地域系統内に小流派を見出すことも可能だが、小区分や呼称の問題は注 4 とも関連するため今後の課題としたい。
- (3) 江南では後漢末の建安年間以降に神獸鏡が増えるため、これらも含めて「呉鏡」とする意見もある〔徐 1984 など〕。江南系と呉鏡を明確に区別することは難しいが、3世紀初頭に魏鏡と同じように、呉鏡にも劣化した製作技術を認められることを重視し、本稿では江南系と呉鏡の項目をたてた。
- (4) 「呉郡朱師」・「張氏元公」・「呉郡鄭蔓」・「清羊」を代表とする漢鏡 6・7 期・三国呉・西晋の「呉派」の存在が想定されているが〔岡村 2013・2017〕、漢鏡 6 期の画像鏡と漢鏡 7 期以降の神獸鏡では異なる製品のため注意を要する。
- (5) なお、出土した製品の製作年代を問わなければ、洛陽からは 2000 面が出土したといわれているが、伝承など曖昧な情報も多いため、新中国成立以降に出土した鏡を集めたという点で科学的な裏付けが重要である〔孔 2013〕。
- (6) 中国の報告でよくあることだが、紋様の同じ鏡は数点だけ図示し、あとは面数のみの報告になりがちである。例えば洛陽西郊漢墓から「博局鏡」は 47 面出土したと報告されているが〔中国科学院考古研究所洛陽発掘隊 1963〕、図を見つけれられたものは 8 面だった。これは、出土数の多い鏡式が量と比例して図示される訳ではなく、一つの鏡式に何型式か認められれば図が増えるようで、報告者の裁量によるところが大きい。今回の対象では方格規矩鏡、双頭龍紋鏡に顕著に発生していると考えられ、これらの数量・割合はより増加したものが実態に近いと考える。比較的単純な紋様の内行花紋鏡も同様の現象が起ころうだが、方格規矩鏡ほど出土数や型式が多くないため、こちらは先の 2 鏡式ほど増加しないと考える。
- (7) N 数の違いは鏡式設定の難しいものと数の少ないものを含めると、図が煩雑になるために除外したからである。
- (8) 例えば皇帝には一尺二寸（約 29cm）の金銀象嵌鉄鏡、皇后と皇太子には七寸（約 17cm）の銀象嵌鉄鏡を 4 面ずつ献上した記述がある。
- (9) 鄂州市の南に位置する湖北省大冶市の銅緑山は銅の採掘地として著名だが、前漢には既に操業を終えていたと考えら

れる [黄石市博物館編 1999]。

- (10) 帯方故地は未調査の可能性もあるが、西晋紀年銘磚は複数出土しており、魏晋墓は発見されているはずである。「泰始」「大康（太康）」銘が多いことは江南地域と同様で、西晋の武帝司馬炎による領土拡張政策の影響と考えられる。30例前後の紀年銘銭が黄海道から出土したと伝わるが、対して魏晋鏡の出土は双頭龍紋鏡1面のため、今後大幅には増加しないと考える。
- (11) 楽浪での鏡生産の可能性も提起されており [西川 2000 など]、実際に青銅器製作工房も見つかっている [鄭 2001・2002]。三角縁神獸鏡の製作地にも挙げられており、重要な地域といえる。しかし、後漢鏡にみた地域単位の製作系統や、武昌での呉鏡生産を踏まえると、「楽浪鏡」といったまとまりを見出すことができなかつたので、筆者は楽浪での鏡生産の可能性を消極的に考えている。
- (12) 西山の報告では釜山大学林志暎の助言として「楽浪地方で3点」とする [西山 2021]。これらが、梅原の報告と重複する資料かどうか判断できず、楽浪出土鉄鏡は5面以上とみておく方が良いだろうが、大きく増加することはないと考える。
- (13) 五銖銭や三翼鏃が沖縄・奄美諸島から出土しており、近年のインド・パシフィックビーズ [小寺 2022] やフィリピン諸島産と考えられるオウムガイ製貝杯 [金 2019 (大谷沢 2022)] の流通経路をふまえると、古墳時代に南西諸島を介した交易があったことを想定することも可能であり、呉と倭の直接交渉の可能性も浮上する。しかし、福建省沿岸・台湾北部からこれらの考古資料の出土が目立たないこと [陳 2024]、宮古島・石垣島などからなる先島諸島と沖縄本島を中心とする沖縄諸島の間にある慶良間海裂を境に文化的な交流が希薄だったと考えられており [宮城 2022 など]、弥生・古墳時代は基本的にこの流通ルートは想定できないと考えられる。なお、沖縄群島の久米島から五銖銭が集中して出土することから、このルートを積極的に評価する見解もあるが [上村 1992・2004、木下 2000 など]、弥生・古墳時代の明確な遺構に伴わず、五銖銭も九州経由でもたらされたとする反対意見もある [中國 2004]。遣唐使が南島路を採用した時期があることは著名で、唐代に鑄造された開元通宝が南西諸島全域から出土しており、これらの五銖銭も唐代にもたらされた可能性があるだろう。

『三国志』呉書・呉主伝によると、230年に呉の孫権は衛温と諸葛直に1万の兵を与え、夷州（現在の台湾）と亶州（現在の九州地方のいずれか）を派遣した記事を確認できるが、結果は兵のほとんどを疫病で失い、亶州にも到達できず、夷州の住人を数千人連れ帰っただけであった。亶州は徐福が到達した伝説的な土地であり、会稽の船舶が嵐に流されたときに偶然たどり着くなど、航路としては定着していなかったと考えられる。

したがって現状の考古資料・文献史料では弥生・古墳時代の南西諸島航路はほとんど機能しておらず、稀に東南アジア産ガラス・貝がもたらされた程度に認識しておく方が穏当だろう。
- (14) 森下の「華北・北部系」は福永のいう魏晋規矩鏡・関連鏡であると示されたため、具体的にどのような鏡を含めたか具体的に示されていない [森下 2006・2007]。岩本はこれらの鏡を詳細に分析したが、双頭龍紋鏡も含めて「華北系」と一括し [岩本 2020]、若干の食い違いもみられる。なお、対象から除外した岩本編年の後半の魏晋鏡を対象にすると、河南省の出土例が大幅に増加する。魏晋鏡の出土地にみえる北京市もしくは洛陽市への偏りは製作時期・地域を考えるうえで重要と考えるが、本稿の趣旨と外れるため今後の課題としたい。
- (15) 北京と香港・澳門をつなぐ京港澳高速道路（中国国家高速 G4）の北京・鄭州区間に相当し、開発の進んだ地級市も点在するため、図示した点は発掘調査の多さを反映している可能性もあり、解釈に注意を要する。

## 参考文献

(日文)

- 秋山進午 1998 「夔鳳鏡について」『考古学雑誌』第84巻第1号  
東 潮 2022 「辰王と卑弥呼」『纏向学の最前線 桜井市纏向学研究センター設立10周年記念論集』桜井市纏向学研究センター  
岩本 崇 2020 『三角縁神獸鏡と古墳時代の社会』六一書房  
岩本 崇 2023 「鏡からみた沖ノ島祭祀の展開」『沖ノ島研究』第9号  
岩本 崇 2024 「伊予市上三谷猿ヶ谷古墳群採集の呉鏡とその歴史的意義」『伊予市内遺跡詳細分布調査報告書』V  
上野祥史 2000 「神獸鏡の作鏡系譜とその盛衰」『史林』第83巻第4号  
上野祥史 2001 「画像鏡の系列と製作年代」『考古学雑誌』第86巻第2号  
上野祥史 2003 「盤龍鏡の諸系列」『国立歴史民俗博物館研究報告』第100集

- 上野祥史 2005 「鏡の生産と流通からみた四川をめぐる地域間関係」『四川省における南方シルクロード（南伝仏教の道）の研究』シルクロード学研究 24
- 上野祥史 2007 「3世紀の神獸鏡生産——画文帯神獸鏡と銘文帯神獸鏡」『中国考古学』第7号
- 上野祥史 2014 「日本列島における中国鏡の分配システムの変革と画期」『国立歴史民俗博物館研究報告』第185集
- 上野祥史 2019 「朝鮮半島南部の鏡と倭韓の交渉」『国立歴史民俗博物館研究報告』第217集
- 宇垣匡雅・岩本崇・ライアン ジョセフ 2024 「宮山遺跡出土遺物の研究」『岡山県立博物館研究報告』第44号
- 鶴島三壽 1991 「龍鈕をもつ鏡—太田南2号墳出土鏡を中心に—」『京都府埋蔵文化財論集』第2集、創立十周年記念誌
- 梅原末治 1924 「北朝鮮発見の古鏡」『東洋学報』第14巻第3号
- 大阪府立弥生文化博物館編 1993 『弥生人の見た楽浪文化』大阪府立弥生文化博物館図録7
- 岡村孝作・東影悠編 2024 『桜井茶白山古墳の研究—再発掘調査と出土遺物再整理—』令和2年度～令和5年度科学研究費助成事業 基盤研究（A）研究成果報告書、天理時報社
- 岡村秀典 1993 「楽浪漢墓出土の鏡」『弥生人の見た楽浪文化』大阪府立弥生文化博物館
- 岡村秀典 1995 「楽浪出土鏡の諸問題」『考古学ジャーナル』No.392
- 岡村秀典 1999 『三角縁神獸鏡の時代』吉川弘文館
- 岡村秀典 2010 「漢鏡五期における淮派の成立」『東方学報』京都第85冊
- 岡村秀典 2012 「後漢鏡における淮派と呉派」『東方学報』京都第87冊
- 岡村秀典 2013 「漢三国西晋時代の紀年鏡—作鏡者からみた神獸鏡の系譜—」『東方学報』京都第88冊
- 岡村秀典 2017 『鏡が語る古代史』岩波新書
- 岡村秀典 2022 「画紋帯神獸鏡の東伝—型式と鉛同位体比からみた九子派の動態—」『東方学報』京都第97冊
- 上村俊雄 1992 「沖繩諸島出土の五銖銭」『鹿大史学』40号
- 上村俊雄 2004 「沖繩の先史・古代—交流・交易—」鹿児島国際大学附置地域総合研究所編『沖繩対外文化交流史—考古学、歴史学、民俗学、人類学の視点から—』日本経済評論社
- 木下尚子 2000 「銭貨からみた琉球列島の交流史」『古代文化』第52巻第3号
- 金 鍾佑 2019（大谷育恵訳 2022）「慶州皇南大塚南墳より出土した新羅鸚鵡杯」『金大考古』81号
- 車崎正彦編 2002 『考古資料大観 五 弥生・古墳時代 鏡』小学館
- 小寺智津子 2022 『ガラスの来た道 古代ユーラシアをつなぐ輝き』歴史文化ライブラリー 563、吉川弘文館
- 実盛良彦 2009 「斜縁神獸鏡の変遷と系譜」『広島大学大学院文学研究科帝釈遺跡群発掘調査室年報』広島大学大学院文学研究科帝釈遺跡群発掘調査室
- 実盛良彦 2012 「斜縁神獸鏡・斜縁四獣鏡の製作」『考古学研究』第59巻第3号
- 実盛良彦 2015 「上方作系浮彫式獣帯鏡と四乳飛禽鏡の製作と意義」『FUSUS』VOL.7
- 下垣仁志 2016 『列島出土鏡集成』同成社
- 高久健二 2009 「楽浪・帯方郡塚室墓の再検討 塚室墓の分類・編年・および諸問題の考察」『国立歴史民俗博物館研究報告』第151集
- 「中国古鏡の研究」班 2011a 「後漢鏡銘集釋」『東方学報』京都第86冊
- 「中国古鏡の研究」班 2011b 「三国西晋鏡銘集釋」『東方学報』京都第86冊
- 「中国古鏡の研究」班 2012 「漢三国西晋紀年鏡銘集釋」『東方学報』京都第87冊
- 「中国古鏡の研究」班 2013 「漢三国鏡銘集釋補遺」『東方学報』京都第88冊陳 2024
- 陳 有貝 2024 『台湾考古学』雄山閣
- 辻田淳一郎 2007 『鏡と初期ヤマト政権』すいれん舎
- 辻田淳一郎 2019 『鏡の古代史』角川選書
- 鄭 仁盛 2001 「楽浪土城と青銅器製作」『東京大学考古学研究室研究紀要』第16号
- 鄭 仁盛 2002 「楽浪土城の青銅鏡」『東京大学考古学研究室研究紀要』第17号
- 東洋学術協会編 1966 『梅原考古資料目録 朝鮮之部』東洋文庫
- 中國 聡 2004 「東アジア的視座に立った弥生時代の再解釈—九州・南西諸島・朝鮮半島・中国—」鹿児島国際大学附置地域総合研究所編『沖繩対外文化交流史—考古学、歴史学、民俗学、人類学の視点から—』日本経済評論社
- 檜山満照 2017 『蜀の美術 鏡と石造遺物にみる後漢後期の四川文化』早稲田大学エウプラクシス叢書 004、早稲田大学出版部
- 西川寿勝 2000 『三角縁神獸鏡と卑弥呼の鏡』学生社



- 西村俊範 1983 「双頭龍文鏡（位至三公鏡）の系譜」『史林』66 卷 1 号
- 西山要一・米田文孝・橘泉 2021 「百舌鳥大塚山古墳出土鉄鏡の象嵌文様」『関西大学博物館紀要』第 27 号
- 原田三壽 1997 「永康元年鏡の特質とその製作背景」『立命館大学考古学論集』I、立命館大学考古学論集刊行会
- 原田三壽 2005 「鈕文様をもつ鏡について」『立命館大学考古学論集』IV、立命館大学考古学論集刊行会
- 福永伸哉 2005 『三角緑神獸鏡の研究』大阪大学出版会
- 馬淵一輝 2017 「獸首鏡の系譜—後漢後期における廣漢と長安を中心に—」『中国考古学』第 17 号
- 馬淵一輝 2022 「斜緑神獸鏡の系譜—考古学的手法と字形分析を中心に—」『古文化研究』第 21 号
- 馬淵一輝 2023 「上方工房の生産活動」『古文化研究』第 22 号
- 馬淵一輝 2024 「袁氏と劉氏の作鏡活動」『古文化研究』第 23 号
- 宮城弘樹 2022 『琉球の考古学』ヒスカルセレクション 考古 6、敬文舎
- 村瀬 陸 2014 「画文帯神獸鏡からみた弥生のおわりと古墳のはじまり」『季刊考古学』第 127 号
- 村松洋介 2004 「斜緑神獸鏡研究の新視点」『古墳文化』創刊号
- 森下章司 1998 「古墳時代前期の年代試論」『古代』第 105 号
- 森下章司 2003 「山東・遼東・楽浪・倭をめぐる古代銅鏡の流通」『東アジアと『半島空間』—山東半島と遼東半島—』思文閣
- 森下章司 2006 「喇嘛洞出土の銅鏡をめぐる」『東アジア考古学論叢—日中共同研究論文集—』奈良文化財研究所
- 森下章司 2007 「銅鏡生産の変容と交流」『考古学研究』第 54 卷第 2 号
- 森下章司 2011 「漢末・三国西晋鏡の展開」『東方学報』京都第 86 冊
- 森下章司 2012 「華西系鏡群と五斗米道」『東方学報』京都第 87 冊
- 森下章司 2014 「後漢鏡製作工房の一形態」『古墳出土品がうつつし出す工房の風景—手工業生産の実像に迫る—』大阪大谷大学博物館報告書第 61 冊
- 森下章司・黄曉芬編 2016 『五斗米道の成立・展開・信仰内容の考古学的研究』平成 24～27 年度科学研究費助成事業 基盤研究 (B) 研究成果報告書、天理時報社
- 森下章司 2024 「桜井茶白山古墳出土鏡の検討」『桜井茶白山古墳の研究—再発掘調査と出土遺物再整理—』
- 山田俊輔 2006 「上方作系浮彫式獸帯鏡の基礎的研究」『會津八一記念博物館研究紀要』第 7 号
- 渡邊義浩 2016 『三国志よりみた邪馬台国』汲古書院

(中文)

- 中国科学院考古研究所洛陽発掘隊 1963 「洛陽西郊漢墓発掘報告」『考古学報』第 2 期
- 鄂州市博物館編 2002 『鄂州銅鏡』中国文学出版社
- 黄石市博物館編 1999 『銅緑山古礦冶遺址』文物出版社
- 湖北省博物館・鄂州市博物館編 1986 『鄂城漢三国六朝銅鏡』文物出版社
- 霍宏偉・史家珍編 2013 『洛鏡銅華 洛陽銅鏡発現与研究』科学出版社 (訳書に岡村秀典監訳・田中一輝・馬淵一輝訳 2016 『洛陽銅鏡』科学出版社東京)
- 孔 祥星 2013 「序」『洛鏡銅華 洛陽銅鏡発現与研究』科学出版社
- 洛陽市文物考古研究院編・趙曉軍主編 2023 『洛陽古代鉄鏡』三秦出版社
- 南京大学歴史系考古專業・湖北省文物考古研究所・鄂州市博物館編 2007 『鄂城六朝墓』科学出版社
- 王 仲殊 1981 「関于日本三角緑神獸鏡的問題」『考古』第 7 期
- 王 仲殊 1987 「“黄初”、“黄武”、“黄龍” 紀年鏡銘辞綜釋」『考古』第 7 期
- 王 仲殊 1989 「論日本出土的呉鏡」『考古』第 2 期
- 徐 萃芳 1984 「三国兩晋南北朝的銅鏡」『考古』第 6 期
- 趙 曉軍 2023 「概述」『洛陽古代鉄鏡』三秦出版社

(その他)

- 公益財団法人東洋文庫「梅原考古写真資料庫 (朝鮮之部)」データベース  
[https://www.toyo-bunko.org/umehara2008/ume\\_query.html](https://www.toyo-bunko.org/umehara2008/ume_query.html)

## 図表出典

- 図1 袁氏作系画像鏡：辛冠潔編 2001『陳介祺藏鏡』文物出版社・121 上方作系獸帶鏡：辛編 2001・113 斜縁：劉體智編 1935『小校經閣金石文字』 画紋帯同向式神獸鏡：上海博物館編 2005『練形神冶 瑩質良工 上海博物館藏銅鏡精品』上海書画出版社・61 盤龍鏡：宜興市文物管理委員會辦公室編 2013『瑩質神工 光耀陽羨一宜興民間收藏銅鏡精品集』文物出版社・159 浮彫式獸帶鏡：周世榮編 1987『銅鏡図案 湖南出土歴代銅鏡』湖南美術出版社・11 画像鏡：上海博物館編 2005・51 三段式神仙鏡：故宮博物院編・何林主編 2008『故宮藏鏡』紫禁城出版社・14 方銘獸紋鏡：黄濬編 1990『尊古齋古鏡集景』上海古籍出版社・77 獸首鏡：黄編 1990・2 環状乳神獸鏡：黄編 1990・5 重列式神獸鏡：末永雅雄・杉本憲司編訳 1984『徐乃昌藏中国古鏡拓影〔影印本〕』木耳社・2 対置式神獸鏡：辛編 2001・155 一部、体裁を整えるために画像を加工した
- 図2 1：安徽省文物考古研究所・六安市文物局編 2008『六安出土銅鏡』文物出版社・135 2：川崎市市民ミュージアム編 2015『古鏡—その神秘の力—』Ⅱ・78 3：深井純氏撮影（廣川守・山本堯編 2018『泉屋博古 青銅鏡』泉屋博古館・60） 4：精華大学漢鏡文化研究課題組編 2014『漢鏡文化研究』下・177 5：蘇奎 2008「四川邛崃発現的三段式神仙銅鏡」『文物』第7期 6：浙江省博物館編 2012『古鏡今照—中国銅鏡研究会成員藏鏡精粹』文物出版社・128
- 図3 1：鄂州市博物館編 2002・140 2：湖北省博物館・鄂州市博物館編 1986・95 3：深井純氏撮影（廣川・山本編 2018・57） 4：平壤名勝旧蹟保存会編 1936『楽浪彩篋塚 遺物聚英』便利堂 5：岡林孝作・水野敏典編 2008『ホケノ山古墳の研究』橿原考古学研究所研究成果第10冊 6：ColBase (<https://colbase.nich.go.jp/>)
- 図4 1：福永 2005 2：深井純氏撮影 3：福永 2005 4：霍・史編 2013・170 5：鄂州市博物館編 2002・178 6：深井純氏撮影
- 図6 1：洛陽市文物考古研究院編 2023・93頁 2：同 101頁
- 図8 1：深井純氏撮影（廣川・山本編 2018・70） 2：鄂州市博物館編 2002・48
- 図13 1：車崎編 2002、102-1 2：同 103-4
- 図14 1：中国社会科学院考古研究所安陽工作隊 2024「河南安陽市大司空村東地西晋十六国墓葬の発掘」『考古』第6期、2：遼寧省文物考古研究所編 2004『三燕文物精粹（日本語版）』奈良文化財研究所
- 表1は西山 2021、表2は岩本 2024をもとに作成、特に断りのないものは筆者作成